

JFC ネットワーク・スタディツアー2013

2013年8月2日(金)～9日(金)まで7泊8日でスタディツアーを開催しました。
今年の参加者は7名でした。マニラコースからの参加は5名で、マニラの最終日から1名が合流し、後半のダバオコースからの合流が1名でした。

◆スケジュール◆

- 8月2日(金) PM マニラ着、マリガヤハウス訪問、オリエンテーション
- 8月3日(土) AM 国籍確認訴訟原告団との交流会 at エコパーク
PM 子どもたちとのワークショップ
- 8月4日(日) AM バティス(※)訪問&バティスヨギ(※)との交流会
バティスのお母さんたちの手作りランチ
PM Ayala 博物館 (※パールバック財団訪問キャンセル)
- 8月5日(月) AM 国内線でダバオへ移動
PM ダバオ着、RGS-COW(※)事務所訪問、オリエンテーション
- 8月6日(火) AM 家庭訪問
PM ホームステイ先へ移動。夕食、ホームステイ
- 8月7日(水) AM お買いもの
PM 日比残留孤児、日系人訪問
ソリダリティナイト、COWの母子とのお別れ会、一緒に夕食
- 8月8日(木) AM ダバオ観光、国内線でマニラへ移動、
PM マニラ観光
- 8月9日(金) AM 日本へ帰国

(※)バティス (Batis Center for Women) 移住労働者として働いていた女性たちの支援。

(※)バティス・ヨギ (Batis Yohgi) 日本人とフィリピン人を親に持つ子どもたちの組織。

(※)RGS-COW(Religious of the Good Shepherd-Center for Overseas) COWはフィリピン人移住労働者の帰国サポートや安易な海外就労に対する啓発活動、人身売買防止活動などを行う団体。JFCネットワークは2007年からCOWで相談を受けたケースも扱っている。

♪参加者たちからの感想をご紹介します♪

◆最も印象に残っているプログラム&その理由

★感想

◆ダバオでのホームステイ

【理由】

私自身、フィリピンのJFCが実際にどのような暮らしをしているのかを知りたくてこのツアーに参加していました。その最大の目的であったし、非常に有意義だったから。

過ごした時間は短くとも、親子と一緒に散歩し、ご飯を食べ、買い物に行くなど、日常生活をわずかでも共に過ごす中で、現地の「空気感」をよく感じ取ることができました。

得がたい経験をたくさんさせていただき、感謝しています。特に現地スタッフ河野さんの献身的なマ

ネジメントには感激しました。彼女の真摯で献身的なマネジメントのおかげで充実したツアーになったと思います。ありがとうございました。

★感想★

JFCの実態を一部でも垣間見れたことは非常に有意義でした。実生活を見た印象としては、ネガティブ、ポジティブの両面ありましたが、皆さんとのかく前を向いて必死に生きている姿に心打たれました。ホームステイでは驚くほど細やかな気遣いをしていただく中で、家族全体が非常に高い精神性を有しておられることがよくわかり、学ぶべき所が多くありました。日本人が忘れがちなおもてなしの心、自分の子どもだけでなく親族の子ども達のことも大切に世話をしている、大家族の結びつきの強さを実感できました。

反面、フィリピンの貧困問題を目の辺りにすることもでき、貧困が様々な社会問題を引き起こすこと、問題解決の難しさも体感させていただきました。やはり話を聞くだけでなく、現地に行って実際に交流し、目で見て経験することは大変重要だと感じた今回のツアーでした。

貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

(徳山育弘さん／弁護士／マニラ途中参加・ダバオコース)

◆ダバオでのホームステイ

【理由】

JFC やその家族から多くの話しを聞くことができ、フィリピン人の生活を体験することもできたため。他のスタディーツアーではなかなかできない体験だと思う。

★感想★

スタディーツアーでは、多くの人との出会いがあり、多様なバックグラウンドを持った人との話を楽しむことができました。2回目の参加であったこともあり、JFCやお母さんとの会話も弾みました。それぞれ苦労していることや大変なことを抱えながらも、前向きなのが印象的でした。特に、ホームステイ先では、JFC から「お父さんの子どもと認知されたいし、日本に行って、早くお父さんに会いたい。」という声を直接聞き、この団体の活動意義を再確認することができました。

スタディーツアー参加者同士の話しもとても面白かったです。参加者の中で唯一の学生だったこともあり、最初は心配していましたが、みなさんとても気さくな方で、JFC の活動についてはもちろん、ご自身のバックグラウンドや私の将来へのアドバイスまで、たくさんのお話を話してくださいました。

JFC の子どもたちの出会いをはじめとして、多くのことを吸収できた、とても中身の濃いスタディーツアーでした。お誘いから現地の手配まで、本当にありがとうございました。

(大場しなのさん／学生／全コース参加)

◆フィリピン日系人会の訪問

【理由】

私はこれまで、中国や北朝鮮からの帰国者、日系南米人のお話しを伺ってきましたが、フィリピン残留日本人についてはすっぽりと抜けていました。日本とフィリピンとの国際関係や両国の国籍法や入管法の狭間で翻弄されてきた当事者のお話しを伺い、見ようとなないと見えない問題が多いことに改めて気づかされました。

★感想★

JFC問題は、子どもたちの人権を守るための実務とJFCを生み出す構造問題、加えて、日本国籍の取得と来日することへの彼らの過度の期待感への対応も必要だと感じました。個別の問題に対応しつ



つ、どのようにしたらフィリピン内部から現状を改革する流れを生みだせるのか、それに関して私たちができることは何かなど、大きな宿題をもらった気分でした。

私はこれまで、帰国したエンターテイナーのその後について、ほとんど知る機会がありませんでした。今回、多くのJFCとその母親たちに出会い、浮かび上がった疑問が一つあります。それはフィリピン人の「家族的な深いつながり」に関する言説についてです。JFCの母親たちが来日した動機は、確かに親や年下のきょうだいたちのためですが、彼女たちのその後を知り、単純に「家族的な深いつながり」を美化する訳にはいかないと感じました。

20歳前後で来日した彼女たちのエンターテイナーとしての寿命はせいぜい30代半ばまで。彼女たちが「よい娘」であり「よい姉」でいられたのは「稼ぎがあった」からです。年下のきょうだいたちは、姉がどのようにしてその金を稼いでいるのか、本当のところは知りません。それは親も同じです。彼女たちも本当の辛さは語らないからです。他人ではないからこそ、「お金」を介在させた関係の冷たさが彼女たちを打ちのめすことがあります。

ホームステイ先のMさんの悩みの多くは母親との葛藤と、息子(19歳)との関係形成に関する戸惑いでした。それは息子にとっても同じです。母子としてのスキップをほとんど経験せずに、15歳でいきなり母子関係に入ろうということ自体が無理なのです。親子は成長過程を共有することで「母子になっていく」ものです。これはMさん固有の問題ではなく、第二世代に共通するものであるような気がします。だとすれば、第二世代に、彼らの母親たちのような家族愛を期待することはできるでしょうか。

マリガヤハウスやBATIS、RGS-COWなどの支援団体につながることでできた母子は、全体から見れば一部でしょう。そうした組織にたどり着けない母子はどうしているのでしょうか。そのように考えると、このまま稼ぎ依存を続けた場合、フィリピン社会の「家族的な深いつながり」という伝統さえも揺らいでいくような気がしてなりません。政府による福祉政策の弱さを「家族」が補っているわけですが、その「家族」そのものがこれからもあたりまえに再生産しうるのかどうか。その点にいくつもの疑問を抱くことになりました。
(武田里子さん／研究者／全コース参加)

◆ソリダリティナイト

【理由】

現地の皆さんは、一般参加者である私についても、(弁護士の方々を含めた)JFCネットワーク関係者と同様に歓迎してくださいました。また、ソリダリティナイトの内容(式次第)も、予想外に充実したものでした。ホスピタリティに感激しました

★感想★

現地の皆さんは、一般参加者である私についても、(弁護士の方々を含めた)JFCネットワーク関係者と同様に歓迎し、また、大変フレンドリー(国民性)に接してくださいました。

私も、この人達のために何かしてあげたい、という気持ちになりました。

JFCネットワークの活動は、弁護士の方々による法的サポートが中心である点、他のNPO団体の活動に比べて特徴的です。

私のような一般の社会人でも、何か、JFCネットワークを介して、JFC及びJFCのお母さん達に具体的に助けられることはないでしょうか？(寄付等の金銭的サポートだけでは、一般社会人と団体との関係は長続きしないと思います。)
(横山浩之さん／会社員／全コース参加)

◆ダバオでのホームステイ

【理由】

MALIGAYA 2013.9.1.

JFCは高校生、喪失ケースで、母は死亡し、祖父と叔母の家族と一緒に暮らしている。日本国籍を取得して日本に行って働くことを希望しており、日本国籍取得や日本行きの可能性について一生懸命質問してきた。その切実さや、日本に行くことを目標と考えて疑わないことなどに複雑な気持ちになった。

また、ステイ先はコンクリート造りのしっかりした家だったが、泊めてもらった部屋の窓には窓枠も入っておらず、出入り自由な状態だった。後でベニヤを打ち付けてもらったが、今夜は眠れないかと思った。

★感想★

ダバオのホームステイが印象に残っている。日本に行って家族のために働くことが自分の役割と信じて疑わない少年に対して、日本に行くことがかならずしも幸せとは限らないことを伝えるのがどんなに難しいか、実感した。また彼が日本に行くことが難しいことを伝えるのも辛かった。いろいろなことのギャップを見せつけられて、とても複雑な気持ちだった。(近藤博徳さん/理事・弁護士/全コース参加)

◆SOLIDARITY NIGHT(ソリダリティナイト)

【理由】

クライアント方ホームステイは勿論ですが、ミンダナオ最終夜のSOLIDARITY NIGHTが大変心に残りました。御準備が大変だったことと思います。JFCの子どもたちがステージに一堂に登壇されると、明らかに日本人の顔つきをした集まりであり、JFC問題を視覚で強く感じる瞬間となりました。使命感が沸いてきます。

★感想★

日本人スタッフが常駐していないミンダナオのJFC案件の事情聴取や証拠収集につき、日本の弁護士として貢献できれば、と思っています。本来は1年間位、弁護士が交代で常駐できればこの上なく、或いは1~数か月間の弁護士インターン滞在も検討して頂ければ、と感じており、僭越ながら各地の弁護士会でも宣伝をさせていただきます。

しかし経済面のほか、海外での人道活動に取り組む日本の弁護士が極めて少ないことなどに鑑み、まだまだ容易ではないと思います。まずは弁護士が1-2週間、ダバオに滞在して、現地のフィリピン人スタッフと共に、ヒアリングと陳述書作成を共に行い、その際に日本の裁判や大使館申請に必要な事項をお伝えする、という体制作りからスタートできないものでしょうか？これはある程度、JFC案件に取り組んだことのある弁護士が望ましいと思いますが、1日1インタビュー+1陳述書作成で、5-10ケースに取り組み、現地スタッフへの指導にもなる形に。ためしに私が2014年に1-2週間、ダバオ滞らせて頂くなど。COWの片隅を使わせて頂けるか、とか、宿舎をどうするか、など、ご一考頂ければ幸いです。

(大川秀史さん/弁護士/全コース参加)

